

国東半島の沿岸沖にある、姫島という小さな島は、ほとんどが漁師とエビ養殖業者からなる小さな地域社会の故郷となっている。その小ささ、わずか7キロメートルの距離しかないにもかかわらず、姫島は歴史的に重要な島である。その存在は主として日本独自の神話を記している8世紀の文献「古事記」に初めて記されていた。この伝説によると、二人の神伊奘諾尊と伊奘冉尊が日本の列島を造るため一緒にやって来た。姫島は12番目の創造島として述べられている。

この創造伝説は、島の名前に関するもう一つの伝説によって補足されている。伝説によると朝鮮本土から心を取り乱した姫君が姫島(文字通りお姫様の島)に朝鮮の王子との結婚を避けるために逃げてきたとある。島でのその当時を述べる民話は何世代にもわたって伝えられてきている。一つの話では、彼女は定期的にかねつけ石で歯を黒く染めていた(前近代的日本では一般的な化粧の習慣であった)。そしてやがてその石に彼女の筆と硯の形をしたくぼみを生むことになった。この遺跡は、姫と姫島の他に例を見ない歴史と地理の関連性に関する神話の基盤となる一連の遺跡である、姫島の7不思議に含まれている。他の遺跡は拍子水という温泉と異様な形の柳の木を含んでいる。